第56回シェイクスピア学会 パネル・ディスカッション

題目:シェイクスピア研究におけるディジタル・ヒューマニティーズの成果と可能性

コーディネイター・講師: 浜名 恵美 (東京女子大学教授)

講師: Thomas W. Dabbs (青山学院大学教授)

末松 美知子 (群馬大学教授)

欧米では Digital Humanities (以下、DH と略記)が進展し、これまでの成果、課題、今後の可能性を論じる時期に入った。日本でもDHは進展しているが、文学部でDHのセンターのある大学は現時点ではないという事実が示すように、遅れをとっている。英米の一部では"adapt or perish"といわれるほど、就職活動をしなければならない若い研究者はもちろん、教員にも、DHの知識と技術が必要な時代に入っている。もちろん、DHには功罪も批判もある。しかし、本パネルでは、日本におけるDHの進展の遅れに危機意識を抱き、あえて「功罪」とせず、DHの成果と可能性を積極的に探ることにした。

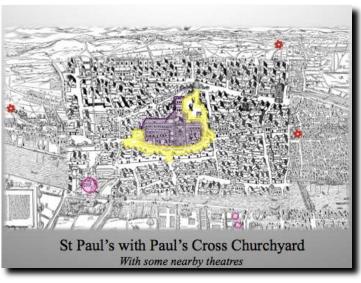
まず浜名が、DH の定義等について論じてから、2017 年 8 月 7-11 日にカナダのモントリ オールで開催された DH2017Conference (DH 国際学会連合主催の学会) (浜名は参加のみ。 Dabbs 教授は発表を行った) の資料およびその他の関連資料の調査にもとづき、DH の成果、 課題、可能性を要約した。ディジタル・アーカイブ(データベース)構築は、ツールの改良 とともに、恒常的に改善・最新化される必要があるのだが、アーカイヴを構築しても活用 されなければ意味がない。EEBO-TCPを代表とするアーカイヴの利用促進が期待されている。 さらに待望されているものは、驚異的速度で発展しているテクノロジーを駆使した革新的 研究と実験だろう。伝統的な文学研究は主に定性分析(質的分析)を行ってきたが、今後 は、定性分析と定量分析(量的分析)の組み合わせがますます必要になる。簡潔にいえば、 「定量分析は数値をもとにした分析」、「定性分析は心情(感情)をもとにした分析」であ る。伝統的な文学研究では、登場人物の性格、感情、生き方などを、理論や批評等を用い て、分析・解釈・考察する。精度や信頼性をあげる必要があるとはいえ、DHでは、感情 の数値化なども試みられているし、グラフや画像等が用いられることも多くなっている。 伝統的な文字資料から、さまざまなメディアを駆使した data visualization(分析・統計 グラフ、チャート、グラフ、画像、写真、映像、音声等)が要求・待望されている。また、 個人研究・単独執筆から(国際) 共同研究・共同執筆への転換も当然の趨勢であろう。

DHの解説に続いて、講師3名のプレゼンテーションに入った。

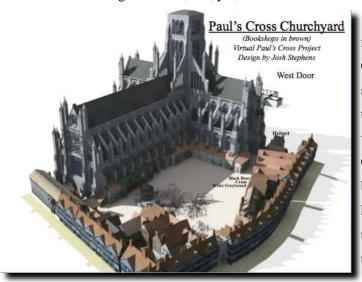
Prof. Dabbs' paper, "Shakespeare and the Digital Echoes of the City," was aimed at users or potential users of new digital technology rather than to those of us who might wish to get involved with digital development. It forwards several usages of digital technology and proposes one model that helps to undo certain dogmas that persist in Shakespeare studies. The general intent of this digital research is to remove Shakespeare from the position of being, the Bard, or a singular artist

writing great literary works in solitude and to, instead, place Shakespearean drama in its time and place by mapping how Shakespearean drama echoes from precise texts at bookshops and at precise physical locations in London. The primary area for the cultivation of drama in Elizabethan London was the cathedral precinct of St Paul's. But this argument is difficult to make without the help of digital cross-referencing and visual mapping.

Perhaps the main reason for the persistence of this myth of Shakespeare is that it is truly difficult to see the interconnections between public theatres in Shakespeare's time, successful public theatres, and the reading and hearing public during those times. The better way to view this period is to look at the City of London, first, then look at how information was distributed in the city. The Agas map at the *Map of Early Modern London (MoEML)* website gives us an overview of the city and, with a closer look, its culture.



In hundreds of examples from translated editions during the Elizabethan period, one can learn more about what actually did happen in the making of Elizabethan drama, indeed, what made Shakespeare and this unique form of drama happen. We can do this more efficiently when we collaborate existing databases, and, yes, draw these databases within larger sets of metadata.



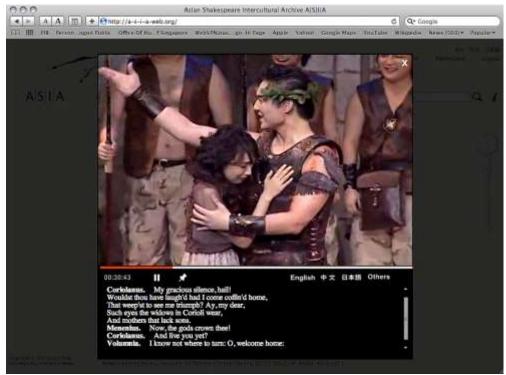
In this recent digital reconstruction of Paul's Cross Churchyard, one finds a place that stands out as the primary location for the bookselling industry in London. It was here that sermons from Paul's Cross pulpit rang out in the years before and during Shakespeare. It was here that these sermons echoed from the cathedral walls. It was also from this location that such pleasure-reading editions as William Painter's Palace of

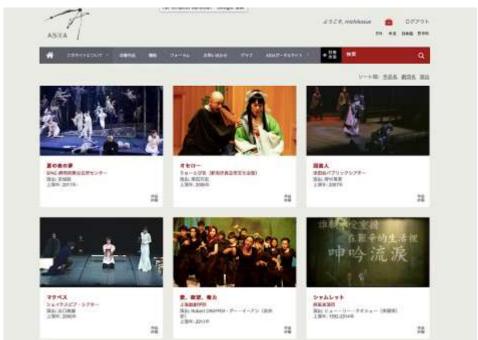
Pleasure found a reception among a among new Elizabethan readers, and, importantly, listeners. This cathedral location, with its bookshops, is the most important location for where new print, both religious and not so religious, began to echo in public consciousness. And, this is where playwrights,

too, listened for what was on the buzz.

St Paul's Cathedral and Paul's Cross churchyard contributed to the eruption of early modern drama in the City of London. Even the most basic examination of Elizabethan history reveals that Shakespearean drama was prominent but fully integrated within an established theatre and print industry, indeed an unprecedented stew of cultural collisions that strutted their way through London during Shakespeare's career as a playwright and poet. Time-held misconceptions coming from, let's call it, Shakespeare's brand, can be challenged by mapping the cultural cacophony of Elizabethan London, the echo chambers of received print works and plays within precise physical locations.

末松氏の発表(「ディジタル化とシェイクスピア上演・上演研究」)では、ディジタル化 の進展が現代のシェイクスピア上演及びその研究・教育にもたらした功罪を、「上演作品」、 「上演を観るメディア」、「上演の研究」という3つの観点から考察した。「上演作品」につ いては、今世紀のイギリスでの上演においてディジタル表現がどのように変遷したかをた どり、特に MR (Mixed Reality)が舞台上で優れた効果を上げた作品として Royal Shakespeare Company の The Tempest (2016-17 年)を分析した。「上演を観るメディア」に ついては、演劇の一回性、現前性を盾に劇場中継を長らく拒み続けてきたイギリス演劇界 でもここ数年広まりつつある Live-viewing について報告した。あくまで劇場での観劇体験 とは似て非なるものではあるが、劇場以外で上演作品を観るメディアは多様化し、市民権 を得てきている。RSC Live from Stratford や NT Live といった映画館での生中継から、 Shakespeare's Globe 劇場の Globe Player や Digital Theatre などのウェブ上での視聴ま で、ディジタルテクノロジーの進展が可能にした観劇体験について考察した。一方、研究・ 教育を目的とした上演作品のウェブ・アーカイブも、MIT の Global Shakespeares、シンガ ポール国立大学の Asian Shakespeare Intercultural Archive (A|S|I|A)、国立台湾大学の Taiwan Shakespeare Database など、アジアのシェイクスピア上演作品を中心に整備されて きている。「上演の研究」に関しては、上記のうち末松が構築に関わっているウェブ・アー カイブ A|S|I|A (アジアのシェイクスピア作品映像全編を 52 本収蔵したオープンアクセス のアーカイブ)を例に、ICTを活用した比較演劇研究の可能性について報告した。





オンデマンドでの全編映像の視聴、各作品の分析データによる比較分析、利用者同士のインタラクティブなオンライン上での意見交換などは、シェイクスピア上演研究をDHとして捉え直し、「従来の主観的な印象批評」や他者の劇評に依存する間接的な上演研究とは異なる、地理的・時間的制約を超えた新たな上演研究の可能性を開くことが期待できると結論づけた。

浜名はシェイクスピア研究における DH はもとより、認知学的アプローチをよる分析について論じる予定であった。しかし、DH、シェイクスピア研究、認知科学は、きわめて複雑な関係にあり、シェイクスピア上演の (digital) stage technology と scenography が与える効果や衝撃、「こころ」、「情動」などに関する DH を駆使した初期近代の言説の分析から最新の認知科学的アプローチまでの検討をとおして、シェイクスピア研究と上演の未来について本格的に考察することは別の機会にゆずることにした。パネル当日は、シェイクスピアの上演の数例をとりあげて、ディジタル映像テクノロジーの発展と認知的インパクトについて指摘した。シェイクスピア研究における認知学的アプローチの台頭につながる文学と認知科学との学際的研究の系譜についても論じた。(認知心理学、神経科学、言語学、進化論生物学、人工知能、マインド(精神、こころ)の哲学をまとめて「認知科学(複数形)」と呼び、文学研究者の間で、この学際的分野への関心が高まっている。)さらに、シェイクスピア研究における認知学的アプローチの代表的書物の特色と成果について論じた。

最終的に、パネル全体として、DH の成果に着目し、未来につながるシェイクスピア研究における DH の多様な可能性を積極的に探ることができたといえる。